



聖人の人間観の再認識

相馬 一意 (そうま いちい)

宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌法要をお迎えする意義はいくつもあるかと思いますが、私は、対社会的な意義を考えて、その人間観を再認識することの大切さを訴えたいと思います。

現代文明における知識量の増大や科学技術の進展などに目を奪われがちです。けれども、私たち人間の本性とか根本的なあり方は、少しも変わっていないように感じられます。

我執^{がしゅう}が決してなくならず、自己中心にしか物事をとらえられず、状況が許せば、あるいは環境次第でいかなる行動をもとる。宗祖が「罪悪深重・煩惱熾盛」と仰^{おつしや}り、また「いづれの行もおよびがたき身」と述べられている（どちらも『歎異抄』のことばです）姿は、特定の時代や一部の人たちだけに通用する見方ではないと思われるからです。

人間が、格別の理由もなしに、人間の命を奪う事件は跡をたちません。利潤追求の果てに、職業倫理を無視した企業活動を行って、取り返しがきかない環境破壊や人命の軽視等に至ったニュースも続出しています。こういう事例に接するたびに、これらが特異な性格の人間によって起こされた例外的な事件であるとは思われなくなってきたのです。

古来より「性善説」が名高く、特に東洋ではこうした人間の本性が喜ばれて参りました。しかし、釈尊は人生は苦であると教えられ、その原因として「渴愛^{かつあい}」（本能的な妄執^{もうしゅう}のころ）を示されました。宗祖は「穢悪汚染^{えあくわぜん}にして清浄の心なし、虚仮諂偽^{こけてんぎ}にして真実の心なし」（ご本典「信文類」本）と述べられています。

宗祖が問題にされたのは、結局は、人間は自力修行のかなわぬ存在であって、阿弥陀仏の本願力・他力^{たりき}によってしか救われないと、宗教的な救いを語るためであったのでしょうか。けれども、そのことはひとまず置いておいても、この、人間は「悪人」でしかない、自己中心にしか考えられない生き物であるというお示しは、知識偏重の現代人にこそ教え示す必要があり、そうしてゆく重要性もあると考えるわけです。

念仏者の社会性が議論されるようになって久しい時が経ちました。私は、迂遠^{うえん}なようでも、この真宗の人間観を伝えることこそが念仏者の社会的な活動だと考えています。人間一人ひとりの罪悪性の自覚^{うなが}を促すことは、社会に対してとても有意義であると思いませんか。

真宗の教えに縁の薄い人たち、知識こそが人類の進歩に寄与すると誤認していると思われる一般の人たちに対して、

そうではない。人間は抛^{ほう}って置いたら何をしでかすかわからない存在なのである。そのことを自覚すること

とこそが、宇宙船・地球号の存続してゆくための第一条件なのである。
と示し理解させる行動をとること、これが現代にはより重要だと感じます。

これまでの人生を思い起こしてみても、人間という瑣末^{さまつ}な存在に呆れかえりつつもまた、その「罪悪性」を抱えた中で偉大な精神活動に畏敬の念も感じて参りました。宗教や仏教その他の文化各方面での人間の活躍が、人類の進歩に貢献して来たことに間違いはありません。

ですが、こうしたすばらしい活動が可能になるのは、自己を全面的に肯定し、自身の力を素朴に信じた結果ではないと思います。自己の無力性に思い至り、人間存在を包み込む大きなあり方に思いをいたすときに発揮されるものでありましょう。すなわち、聖人の「罪悪深重^{ほんぶ}の凡夫」という人間観に立つことが、こういう人間のすばらしい活動の出発点であると伝えよう、というのです。

「自分は善人だと思いついでいる人ほど、独りよがりの落とし穴に陥りがちです」（ご門主ご著作『世の中安穩なれ』二〇二頁）から、そのことを指摘して、

自分が悪人であるということになれば、自分が上に立って、他の人を責めるようなことはできなくなるわけですから。自らの至らなさに気付くわけですから。そこから他の人々を暖かく見るような姿勢が出てくるといえます。（同上書一七八頁）

というふうに考えてもらうためです。

自分もまたここに言う「悪人」の一人でしかないと見定めたなら、これと反対に、お互いを尊重した行動につながってゆくであります。

結局、こんなことを言いますと、社会的な行動と申しまして、真宗の教義を伝えるという、旧態依然たる方法に帰着してしまいますが、今の時代、これを意識して社会に親鸞聖人の人間のとらえ方を積極的に伝えてゆくことが、本当の「社会性」になるのだと考えます。

「世の中安穩なれ」という宗祖聖人の願いは、こうして実現に近づくのではないのでしょうか。いずれにしても、こういう意味でも、七百五十回大遠忌の意義を私はとらえたいと思っています。

（司教）